



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

6. 岡山県の夏秋トマトにおける薬剤耐性灰色かび病菌の発生状況

[要約]

岡山県内の夏秋トマト産地において、アミスター20 フロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、ロブラール水和剤、アフェットフロアブル及びカンタスドライフロアブルに耐性のトマト灰色かび病菌が高率に発生している。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

県内の夏秋トマト産地において、灰色かび病が発生し、収量の減少が問題となっている。本病に対しては薬剤を基幹とした防除が行われており、耐性菌の発生による防除効果の低下が懸念されている。そこで、県内のトマト灰色かび病菌の薬剤感受性低下の実態を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. Q o I 剤では、アミスター20 フロアブルの耐性菌は 85%、ファンタジスタ顆粒水和剤の弱耐性菌が 85%、耐性菌が 5 %の圃場で発生している（図 1）。
2. S D H I 剤では、アフェットフロアブルの弱耐性菌は 5 %、耐性菌は 60%、カンタスドライフロアブルの耐性菌は 65%の圃場で発生している（図 1）。
3. ロブラール水和剤の耐性菌は 80%の圃場で発生している（図 1）。
4. ゲッター水和剤（チオファネートメチル・ジエトフェンカルブ水和剤）では、チオファネートメチル耐性かつジエトフェンカルブ弱耐性菌が全調査圃場で発生しているが（図 1）、生物検定では、これらの耐性菌に対しても本剤の 1,000 倍希釈液による防除効果の低下は認められていない（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 防除効果が低い場合は、耐性菌が発生している可能性があるため、他系統の薬剤による防除を行う。
2. 耐性菌の発達を防止するため、防除効果が認められる場合でも、同一系統の薬剤の使用は年 1 ～ 2 回にとどめる。
3. 薬剤の成分が異なっても、同一グループの剤を連用すると耐性が発達するおそれがある。Q o I 剤（アミスター20 フロアブル及びファンタジスタ顆粒水和剤等）又は S D H I 剤（アフェットフロアブル及びカンタスドライフロアブル等）を使用する場合には、それぞれのグループごとに単剤での使用は 1 回、他剤との混用又は混合剤の場合は 2 回までとする（ただし、Q o I 剤又は S D H I 剤との混用又は混合剤の場合は 1 回まで、日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会、2018 年 11 月更新の野菜・果樹・茶における Q o I 剤及び S D H I 剤使用ガイドライン [http://www.taiseikin.jp/mwbhwp/wp-content/uploads/03野菜・果樹・茶におけるQoI剤及びSDHI剤使用ガイドライン2018タマネギ追加\).pdf](http://www.taiseikin.jp/mwbhwp/wp-content/uploads/03野菜・果樹・茶におけるQoI剤及びSDHI剤使用ガイドライン2018タマネギ追加).pdf) 参照。）



4. 薬液はむらなく十分付着するよう、丁寧に散布する。

[具体的データ]

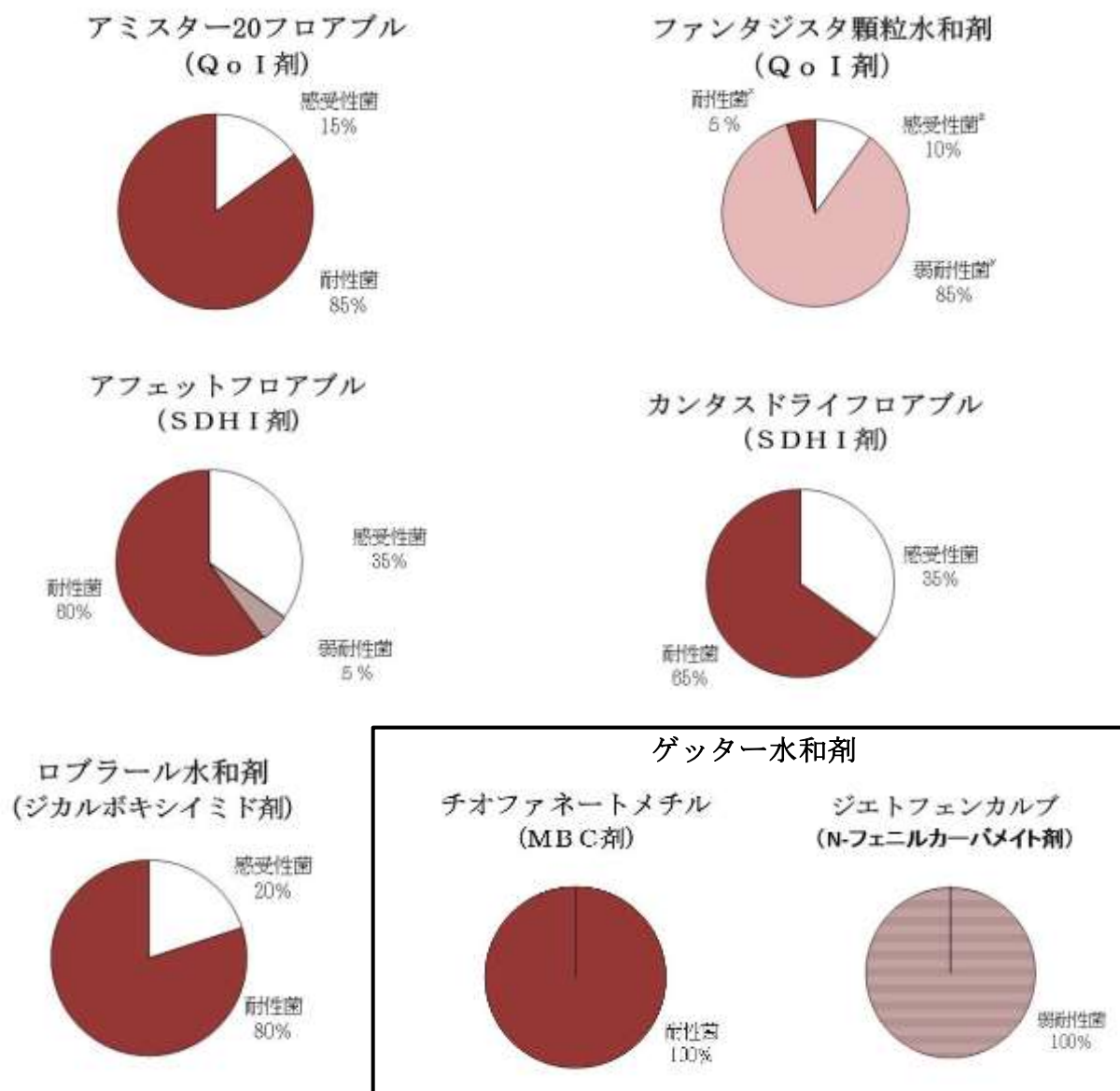


図1 岡山県内の薬剤耐性トマト灰色かび病菌の発生圃場率 (%)

注) 高梁市、新見市及び真庭市の 20 圃場から採取した 201~203 菌株を用いた培地検定及びキュウリ子葉法による生物検定の結果から判定した

^a 感受性菌：感受性の低下は認められない

^b 弱耐性菌：培地検定で感受性低下が認められた菌のうち、実用濃度の 10 分の 1 に希釈した薬剤に対する防除効果の低下が認められる

^c 耐性菌：培地検定で感受性低下が認められた菌のうち、実用濃度の薬剤に対する防除効果の低下が認められる

[その他]

研究課題名：主要病害虫の薬剤感受性の実態解明と有効薬剤の選抜

予算区分：交付金

研究期間：2018 年度

研究担当者：矢尾幸世、金谷寛子、桐野菜美子

関連情報等：1) [平成 22 年度試験研究主要成果、39-40](#)